

JACET関西支部「海外の外国語教育」2021年度第3回例会
2021年12月26日[zoomミーティングによるオンライン]

「海外の教育からの英語教育への示唆」

A journey to the inner self and outer world through English education

浅川 和也

前回、出席させていただき、何か話題提供との打診をいただきました。海外の外国語教育に関して調査・研究したりしているわけではないのですが、ヨーロッパにおける歴史教育とかに、現在、関心を持っています。また、これまで平和教育に関する国際的なネットワークにかかわっています。「英語教育における内なる旅・外なる旅」というような題をさしあげたところ、「海外の教育からの・・・」としていただきました。海外の教育事情に関しても、比較教育学会というところもあり、本格的な研究をしているわけではありません。高校英語教師を10年していたわけですが、英語を学ぶのに、何かを伝えたいという思いから、いろいろしていたことを思い出しながらお話をさせていただきます。

最近のみなさんとはちがい、海外留学もかなわなかった世代です。わたくしの最初の海外渡航は、1980年、大学卒業を前にして、タイにあるカンボジア難民キャンプに派遣されたことでした。YMCAというのは、知られていますが、YMBAというのもありまして、、、仏教系の大学に学んでいて、僧侶のかたがたに同行させていただきました。英語教師となり、埼玉県の公立高校に10年、その後、短大・大学に務めました。数えてみると、それぞれ短期なのですが、24カ国



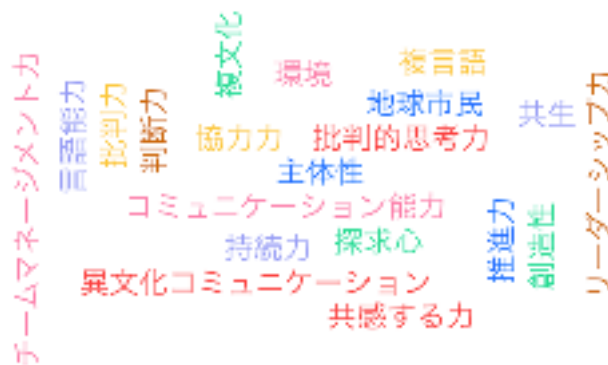
(韓国、台湾、フィリピン、マレーシア、シンガポール、ベトナム、タイ、カンボジア、ミャンマー、スリランカ、エジプト、ケニア、イスラエル、パレスチナ、レバノン、アルメニア、トルコ、ウクライナ、クリミア、ポーランド、ハンガリー、リトアニア、ラトビア、スペイン(バスク)、フランス、ドイツ、英国(北アイルランド)、オランダ、オーストリア、オーストラリア、ニュージーランド、コロンビア、米国、プエルトリコ)に行ったこととなります。ちなみにこの地図はピーター図法といって、面積比が投影されているものです。球体を平面であらわすには難があり、よく目にする地図では、アフリカはちいさく、ヨーロッパやロシア、北米はおおきくなっていて、わたくしたちの意識にも作用しているといわれます。

面積比が投影されているものです。球体を平面であらわすには難があり、よく目にする地図では、アフリカはちいさく、ヨーロッパやロシア、北米はおおきくなっていて、わたくしたちの意識にも作用しているといわれます。

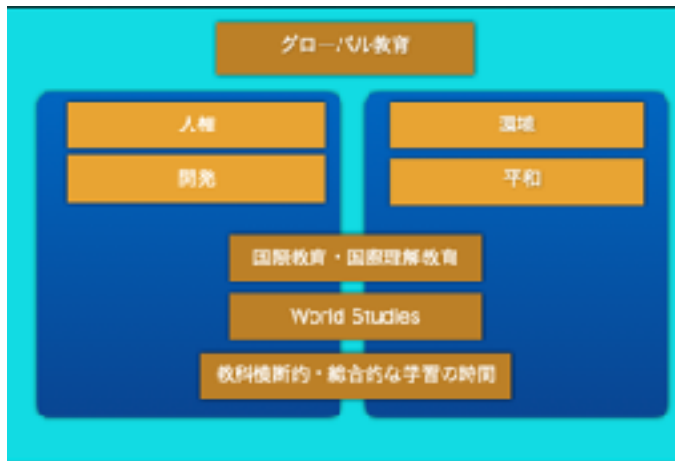
平和教育にかかわって、コロンビア大学におられたBetty Reardonさんがはじめられた International Institute on Peace Education : IIPE[<https://www.i-i-p-e.org>]という2週間ほどのセミナーに何度か参加しました。当初はニューヨークで実施されていたようですが、さまざまな地域で開催されてきていて、日本でも何回か実施されています。2012年、国立女性教育会館

において実施した際の運営に尽力しました。もう1つ、GPPAC (Global Partnership for the Prevention of Armed Conflict) [<https://gppac.net>] という、武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップにかかわっています。国連経済社会理事会にはNGOが関与していますが、安全保障には、かかわりが薄い状況でした。当時 (2002年) のコフィ・アナン国連事務総長によるよびかけによって、準備されたもので、そのなかの平和教育のグループ[<https://gppac.net/what-we-do/peace-education>]に参加しています。

かつては国際人には、英語が必須であるとか、「グローバル」社会を生き抜くための資質について、あれこれ言われていますが、みなさんに教育において何を求めるかをうかがってみたいと思います。昨今、時代に対応するために必要な○○力とか、○○性、○○心といった一般的にいわれているものでも、また、独自の考えによるものを、mentimeterにいらていただいて、ワードクラウドを生成したものを次にあげておきます。



D.セルビー(David Selby)さんからグローバル教育について学びました。D.セルビーさんは、いわゆる国際化に対応する教育のみならず、ホリスティックな内面性にもつながるのが、グローバル教育としました。ユネスコは戦後、国際理解教育 (後に国際教育とされますが) を提唱し、1974年には「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」勧告なされます。日本では、国際化に対応する教育となってしまうますが、後の英国でのワールドスタディーズ、米国でのグローバル教育の展開では、あらゆる教育において、人権・環境・開発・平和の課題にとりくむものとされているように理解しています。



国際社会では、2000年からのMDGs：ミレニアム開発目標、その後、2015年から2030年へとSDGs：持続可能な開発目標を実現するべく、このごろでは、政府・産業界によるとりくみもみられるようになっていきます。教育ではESD：持続可能な開発のための教育(2005～2014)およびグローバル・アクション・プログラム (GAP) (2015～2019)そして、ESD for 2030(2020～2030)へとつながっています。国連は、2018年より5月16日を平和に共存する国際デー (International Day of Living Together in Peace : [<https://www.un.org/en/observances/living-in-peace-day>]) としましたが、あまり知られていません。





当初、文科省が示したESDの概念図[<https://www.unesco-school.mext.go.jp/aspnet/esd/>]に不足を感じて、もっと社会問題にせまるようなESDのエッセンスをと、市民によるESD-Jという組織からの提言をしました[<https://www.esd-j.org/wp/wp-content/uploads/2012/05/esdgawakaru.pdf>]。

1996年に、ユネスコが Learning: the treasure within [<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000109590>]という報告書をだしています。そこでは Learning to live together を重要な1つの柱とされ

ています。人権教育や開発教育でも参加型の学習が推奨されるようになり、英国でのワールドスタディーズを推進したD.SelbyとG.Pikeさんらの著書も翻訳されました。Global Teacher, Global Learner (1988)『地球市民を育む学習』(1997, 明石書店)は古典といえます。D.Selbyさんは、英国のヨーク大学から、カナダのトロント大学のOISEに移り、英国に戻って(プリムス大学)で教えられて、その後、Sustainable Frontiers [<http://www.sustainabilityfrontiers.org/index.php?page=david-selby>]をたちあげ、Climate Change Educationを推進しています。

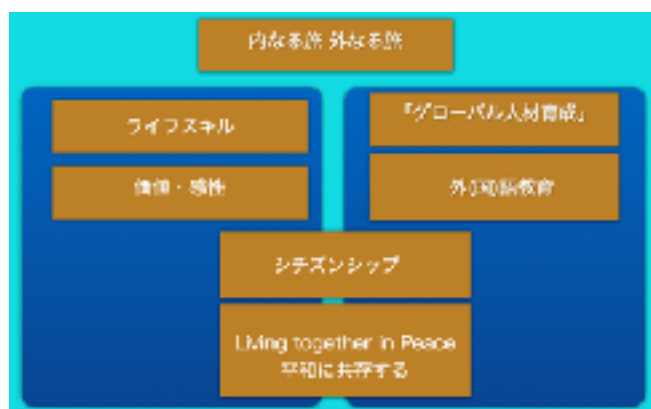
日本の教育関係者を対象に、1995年から5年ほど、毎年夏、2週間ほどのセルビーさんによるグローバル教育のワークショップをカナダのビクトリア大学の施設でしていました。後にOISEに留学をされた小関一也さんがグローバル教育をまとめて「地球市民を育む学習～”地域”から持続可能な”世界”のために～」というウェブ・サイト([<http://www.tokiwa.ac.jp/~oseki/index.html>])をつくられています。小関さんが中心となり、In the Global Classroom という書籍を『グローバルクラスルーム』(2007, 明石書店)としても翻訳されました[<https://www.akashi.co.jp/book/b65625.html>]。『グローバルクラスルーム』の目次を見ると、英国ではテーマ学習ともされるのですが、コンテンツとして環境・開発・人権・平和があげられていることが見てとれます。また、ちがいを認め、つながりをつくり、参加のプロセスをへて、よりよい未来をつくるということは、ウェブつまり、クモの巣状にあり、相互依存関係にあるとされます。そうしたことは仏教、密教での曼荼羅を想起させます。糸を使って、実際につながりを体験することもワークショップの定番でした。いずれにせよ、たとえば民主主義を学ぶのに、生徒からの意見は問わないとするような風刺画が印象的でした。つまり、内容と方法が一致しなければ、ほんものの学びにはならないわけです。

戦後、日本へはソビエト教育学からの集団づくりも紹介され、どちらかという教科外活動でとりくまれたように思います。また米国からのデューイ (John Dewey) による民主教育、ロジャース (Carl Ransom Rogers) による来談者中心、後の学習者中心のヒューマンスティックアプローチもありました。ESR (Educators for Social Responsibilities) という教師による団体は、70年代から80年代に反核運動を展開しますが、その後、教室での協同学習をすすめるようになります。最近では、CASEL (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning [<https://casel.org>]) という団体が協同学習をによって展開し、学力を獲得するうえでも有効とされ、北米では紛争解決 (Conflict Resolution) 教育が平和教育だとされたりしています。児童

英語教育関係者には、スペンサー・ケーガン（Spencer Kagan）は知られていました。最近、翻訳書が刊行されたと聞いています。

児童・生徒・学生が相互に協調するという手法は、構成的グループエンカウンター[http://www.toshobunka.co.jp/books/searchresult.php?genre_cd=7]と類似しています。NHKのプロフェッショナル仕事の流儀で、鹿島真弓さんのことがとりあげていました[<https://www.nhk.or.jp/professional/2007/0403/>]。そのなかで紹介されている「権利の熱気球」という活動は、どの権利が重要か、序列（ランキング）し、それをもとに話し合う手法で、D.セルビーさんのワークショップでもかならずなされるものでした。

D.セルビーさんは、学ぶことを、内なる旅 外なる旅としていました。そのためにさまざまな問題



に、どのようにして多くの人びととかかわりながらとりくむか、教室のなかで体験的に学ぶことを提唱していたと思います。人びとが、ものごとをどうとらえるか、それぞれで正解はないものだということが前提となります。たとえば、自分にとって将来は、次のどれが、あてはまると思いますでしょうか。

1. The future is like a blank sheet of paper.

2. The future is like a railway track between two great cities.

3. The future is entirely random, a dice game.

4. The future is like a great ocean.

5. The future is mighty river and we are in a boat on the river.



必ずしも、正解はなく、まず自分がどう考えるか、同時に重要なのは内面の感情だといえます。D.セルビーさんは、たえず、What do you feel?と問われました。北アイルランドの Council for the Curriculum, Examinations & Assessmentによるカリキュラムにある Exploring controversial

issues [<https://ccea.org.uk/learning-resources/teaching-controversial-issues>]では、Session 7 Teaching and learning approaches: Supporting pupils' emotional development において、Brave / Cheerful / Angry / Frustrated / Confused / Embarrassed / Uncomfortable / Happy / Worried といった感情の語彙が例示され、温度計のように 6:angry, 5:annoyed, 4:sad, 3:calming down, 2:relaxed, 1:very relaxed, 0:deeply relaxed というように感情をあてはめて尺度で示すような工夫も見られました。

開発・環境・人権・平和といった4つの領域のうち、まず、開発教育をみてみましょう。開発教育は、南北問題にたいして、南の人びとが飢餓や貧困に苦しむのは、自分たちの問題だということから、はじまりました。英国におけるOxfamという団体が典型で、アフリカの飢餓救援にあたり、飢餓はアフリカの問題ではなく、英国などの「先進国」の引きおこした問題であり、開発教育が展開されるようにもなったわけです [<https://oxfamlibrary.openrepository.com/handle/10546/620557>]。南北問題として、とくに「先進国」と途上国の格差を扱っていましたが、もちろん貧困問題は、今、「先進国」のなかにもあり、当初とは変化してきてはいます。Oxfamによるバナナを題材にしたGo Bananas: Help learners aged 7-11 discover where their food comes from [<https://oxfamlibrary.openrepository.com/handle/10546/620732>] という教材パッケージはたくさんの写真からなり、バナナがどのように栽培・生産・加工され、流通するかわかるようになっていきます。日本でも開発教育協会 [<http://www.dear.or.jp>] がさまざまな教材づくりがされていて、そのうちのいくつかが英語に翻訳されています [<https://www2.rikkyo.ac.jp/web/esdrc/products/product2.html>]。

写真やポスターから何が読みとれるか、フォトランゲッジという手法がよく使われます。新型感染症に苛まれる前は、壁に写真やポスターを貼って、「おや」と思ったものにシールを貼るというようにすすめたものでした。バナナ農園ではありませんが、ミンダナオで、パイナップルの収穫に立ち会ったことがあります。朝が早いので、前の日から労働組合の事務所に泊まって、夜が明けて暑くなる前に、午前4時ころにトラックに乗って現場に行きました。パイナップルの収穫は、過酷なものにもかかわらず、わずかな賃金しか労働者は得られません。バナナでは売価の7.0%しか、労働者の対価として支払われないとのデータもあります。なおかつ、ミンダナオなどでの外国資本による巨大なプランテーションでは、単一作物栽培がなされているわけで、主食である米は、人口増のため最近では輸入せざるを得なくなっているという実態もあります。他にもChristian Aidという団体からもいろいろ提供されています [<https://www.christianaid.org.uk/get-involved/schools/primary-teaching-resources>]。

次は、環境教育の例です。D. セルビーさんはHumane Education（動物愛護教育）に熱心でした。これも写真をつかった活動です。写真の一部から、あれこれ考えてみることをします。どこにいて、まわりは、どんなで、もし吹き出しをつけるとしたら、何か、セリフを考えてみます。教室では、写真の一部を切り取ったものを配布して、大きな紙に、貼って、さまざま書き込んでみるようにしました。正解はないとしながらも、もともとはどのような写真だったか知りたくなるのは仕方のないことですね。

次に人権教育のものとして、Council EuropeによるThe European Youth Centre in Budapest (EYCB) [www.coe.int/eycb] でつくられたものをあげておきます。言語教育ではオーストリアのグラーツにあるThe European Centre of Modern Languages(ECML)は外国語教育関係者に知られていると思いますが、EYCBはハンガリーのブダペストにあります。そこでCompass: Manual for Human Rights Education with Young People [<https://www.coe.int/en/web/compass>] と、子どもむけのCompassito: manual on human rights education for children [<https://rm.coe.int/16807023d0>] がつくられています。日本では書籍として有償で出版されていますが、英語ほかの版は無料でダウンロードできます。

平和教育のものとしては、Learning to Abolish War があります。1999年5月のハーグでおこなわれた平和会議で、国連が定めた平和の文化国際年（2000年）において、平和の文化を実現するための教育の推進にあたり編纂されたものです。英語などの版は無料でダウンロードできます[<https://www.peace-ed-campaign.org/learning-to-abolish-war-teaching-toward-a-culture-of-peace/>]。日本語版として『戦争をなくすための平和教育』（明石書店）として翻訳いたしました。

ホロコーストに関する教育として、『アンネの日記』がとりあげられますが、アンネフランク財団では、ヨーロッパにおける差別・偏見の解消のための教育にとりこんでいます[<https://www.annefrank.org/en/education/>]。Reading & writing with Anne Frankのためのワークブックとマニュアルが公開されています[<https://www.annefrank.org/en/education/product/63/reading-writing-with-anne-frank/#tabs-363626-tab-2>]。また Stories that Moved というプロジェクトでは、オランダに移住した若者の体験をインタビューした映像からなっています。同世代の体験は、学生の共感を得ることができると思います[<https://www.storiesthatmove.org/nl/home/>]。

ユネスコによるUNESCO Writing Peace[<https://en.unesco.org/writing-peace-manual>]という世界の24の言語の文字（平和とかかれています）をとりあげた、教材があります。これも無料でダウンロードできます。

EuroClioというヨーロッパの歴史教育者団体のことも紹介しておきます[https://www.euroclio.eu/resources/#projects_widget-0-0-0-all]。歴史教師が集まり、歴史は暗記ではなく、歴史を実際にいかすにはどうするかというような論議をしています。Learning to Disagree [<https://www.euroclio.eu/project/learning-to-disagree/>]というプロジェクトもなされています。またEuroClioではCouncil Europeと連携をして、博物館や美術館から提供された写真を利用して授業をすすめるHistoriana [<https://historiana.eu/historical-content>]というプロジェクトを展開しています。たとえばThe visual front [<https://historiana.eu/historical-content/source-collections/the-visual-front>]では第一次世界大戦時の写真が集められており、それらを組み合わせて授業を考案することができるようになっています。

最後に、ベツレヘムにつくられつつある分離壁[<https://www.aljazeera.com/gallery/2020/7/8/in-pictures-israels-illegal-separation-wall-still-divides>]をごらんください。MEND



(Middle East Nonviolence and Democracy) という団体で訪れました。イスラエル当局は、西岸地区に植民をすすめていて、入植地をハイウェイでむすび、パレスチナの人びとが行き来できなくなるとのことで、検問所で、病人や妊産婦が足止めをされるという苦境も訴えられていました。問題をかかえている人びとは、雄弁で、わたくしたちは、グローバル社会を担うために言葉を

教え学ぶのであれば、人びとをへだてることになるようなことを助長してはならないと思うのです。

幸福の研究というのは、まだ緒についたばかりとのことですが、社会的なネットワークが幸福につながるといいます。また、このごろ、早期退職するという話を多く聞きます。それだけ現場がたいへんだということでしょうが、皆が、幸せになることもSDGsでめざすところであり、まず、教師が幸せ、wellbeingであるように願っています。